

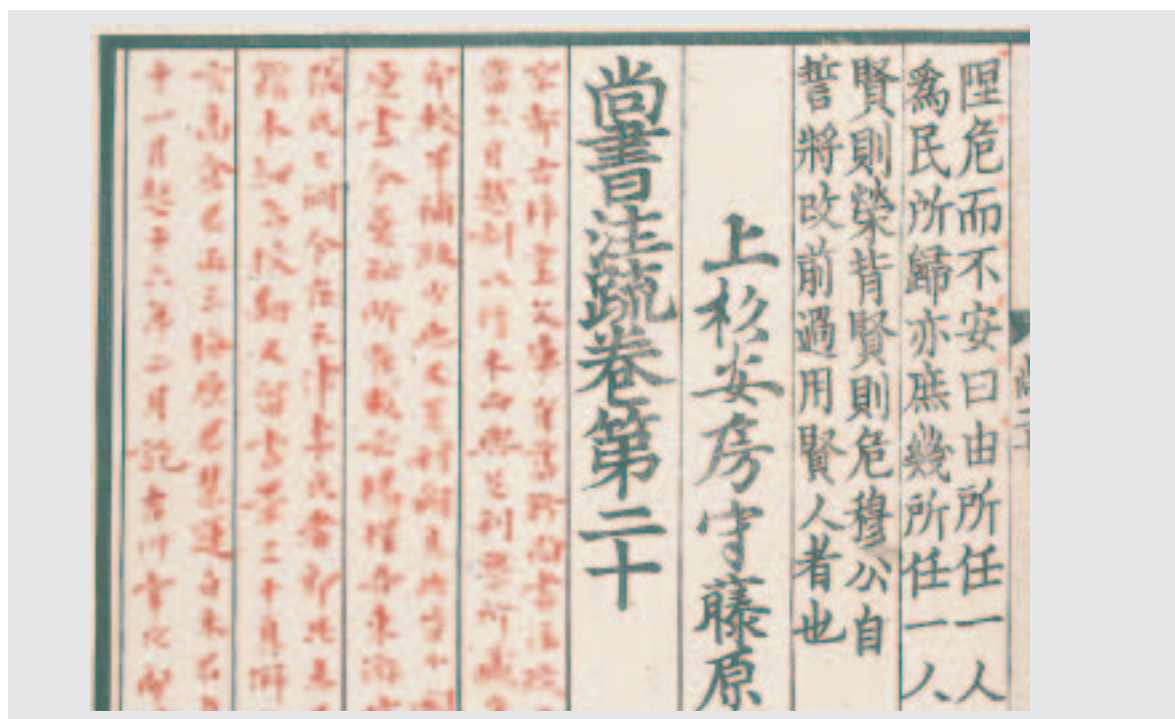
Title	漢字と情報 No.4
Author(s)	
Citation	漢字と情報 (2002), 4: 1-8
Issue Date	2002-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/57064
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

漢字と情報

No. 4
2002・3



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



共同研究：漢字情報基礎論の試み

テキスト二種

中国ムスリムの音訳特殊文字

人文研のアーカイブス(4) 『尚書正義』

共同研究：漢字情報基礎論の試み

武田時昌

パソコンの広く普及し、インターネットや電子テキストによる情報のやり取りが活発に行なわれるようになって、人文社会系の研究スタイルも大きく変わろうとしている。独自の文献考証の方法論を確立してきた中国学においても、避けることができない潮流である。

2000年4月に人文科学研究所の東洋学文献センターが漢字情報研究センターに改組され、コンピュータに精通した理系スタッフが加わったのも、その顕著な現れである。

最近、有形文化財に認定されたセンターの建物は、国内外のテレビでも紹介されたりして、京都の名所の一つになりつつある。ところが、玄関を一步入ると、眼には見えない異変が起こっている。実は、建物内には電波LANが張り巡らされていて、研究室でも、閲覧室、書庫でも、インターネットに自在にアクセスできるようになっている。中国学におけるIT革命の拠点となるべく、ハイテク機器を導入したインテリジェントビルに変貌しようというわけである。

もちろん、長い伝統を誇る東洋学のシンボルにふさわしい風雅な雰囲気は、依然として漂わせている。もはや科学技術が伝統文化を駆逐する時代は終わったのだ。21世紀には両者を融和させながら新たな文化創生を試みるべきである。

そうした視座に立つならば、従来の文献資料学から漢字情報学へのグレードアップを図る必要があるように思われる。そこで、新センターのスタッフを中心に、パソコンに精通した中国学の各分野の研究者とともに、その端緒を開く試行的な共同研究を、「漢字情報基礎論の試み」と銘打って行うことにした。

ところで、コンピュータというのは、超高速計算機である。複雑な関数演算とは全く無縁な暮らしを送る人々の間でも大いに重宝されるようにな

ったきっかけは、ワープロ機能を搭載したパソコンの登場にあった。

歴史的に振り返ってみると、1940年代後半から始まるコンピュータの技術開発は、めざましいものがあった。真空管、トランジスタから集積回路へと内部改造され、やがて一秒間に数億回の演算処理を行うスーパーコンピュータが製作された。

ところが、大型化、高速化とは異なる流れが1970年代に生じた。すなわち、マイクロプロセッサというチップによって小型化した個人用コンピュータが登場したのである。それが、アメリカのアップルⅡを代表とするマイクロコンピュータであり、パソコン革命の始まりであった。

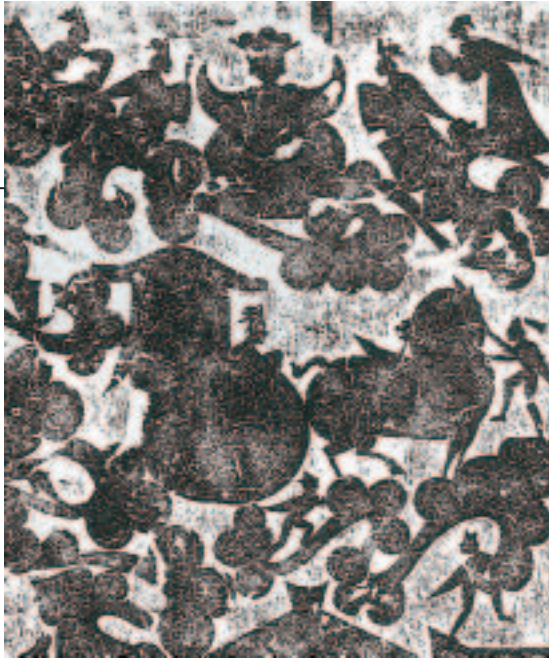
マイクロプロセッサ開発のきっかけを与えたのは、プログラム内蔵を志向した日本の電卓であった。電卓は、ソロバンを社会から抹殺し、江戸の和算文化に終止符を打たせた「刺客」であるが、海の向こうで意外な貢献を果たしていたのである。

日本では、1978年に東芝が日本語ワープロJW-10を開発し、翌年に日本電気がパソコンの初期モデルであるPC8001を発売した。それから数年後に、パソコンは先端企業、理系研究者やゲームマニアだけのツールでなくなり、ワープロが筆紙に代わる書写手段に急成長した。

文字の文化史から見れば、漢代の紙の発明や宋代の印刷術の発達に匹敵するくらいの大変革である。書物の形態だけではなく、文体や思考様式まで大きく変化させてしまうにちがいない。シャノンが情報理論を確立してコンピュータの汎用性を唱えたが、その意図がこのような形で実現するとは、誰が予想したであろう。

ワープロを使い始めると、これまで気がつかなかった漢字の問題に出くわした。人名や地名に輸入、表示できない文字、すなわちJISコード規格にない外字があり、その処理に大いに悩まれた。その結果、漢字への関心が大いに高まった。

漢字を制限しようとする議論は、西周の「洋字を以て国語を書するの論」(「明六雑誌」第1号、1872)を代表として、近代化を推進しようとする



明治以来の国策の一つであった。戦後はさらにその傾向が強まり、常用漢字や JIS コード規格から除外された文字群に、明るい未来はなかった。

しかし、今や事態は反転している。コンピュータの中で7万字以上に及ぶ漢字が一挙に復活を果たしたのだ。すなわち、国際規格の文字コード ISO 10646 が定められ、日本、中国、台湾に韓国、ベトナムを含めた5ヶ国の漢字を1セットに統合したものが国際間で利用できる状況になった。

文字コード制定の過程を顧みれば、漢字の歴史性をなおざりにしてきたように思われる。漢字は、表音文字のアルファベットとは異なり、文字数が多い上に、俗字、異体字がいくつも存在し、発音や意味にも史の変遷がある。汎用性のある高品質な文字データベースを作成しようとするれば、専門的な立場でそれらを十分に検討しなければならず、さらに古典での用例集作りも必要となってくる。

コンピュータ科学者と中国学者とが一堂に会し、漢字情報学の共同研究を行う意義はそこにある。中国学研究にとっても、これまで研究者の手作業に頼ってきた資料の整理、索引作りは、コンピュータ処理で迅速に行えるし、多様な情報を内包しうる階層化したハイパーテキストというのは、これまで培ってきた文献考証の「知」のあり方を表現するのに打ってつけであるように思われる。

インターネット時代における中国学の行方は、コンピュータを活用して、研究情報の収集、整理、読解に一連の処理システムを構築し、国際的な知

的ネットワークを形成できるかどうかにかかっていると言っていいたいだろう。

菊池大麓は「理学之説」(「東洋学芸雑誌」第33号, 1884)において、自然科学(理学)を学ぼうとする上での弊害として、漢字の存在とともに漢学者をやり玉に挙げ、「書物を読めば、之を学者と称」し、文字の訓詁に終始する「漢学の弊風」を嘆いている。しかし、コンピュータ世界で漢字が復権したのであれば、漢学者もパソコンを自在に使いこなして、学風を一新させ、仮想空間に颯爽と登場したいものである。

なお、4月に研究会を立ち上げてから、一年になるが、その間に行われた研究発表の題目と報告者は、以下の通りである。

- 4/20 『インターネット時代の文字コード』を読む(武田時昌)
- 5/18 文字データベースに基づく文字表現モデル(守岡知彦)
- 6/1 日本における最新文字コード事情(安岡孝一)
- 7/13 Kanji Database Project を通じてわかったこと Unicode3.1 収載漢字(Ext. B)の性格(師茂樹)
- 9/21 マークアップ手法に基づくドキュメントの電子化について SGML/XML の基礎と実際(Wittern, C.)
- 10/19 マークアップと注釈(宇佐美文理)
- 11/16 イスラム教漢訳文献の諸問題 訳語文字を中心として(佐藤実)
- 1/16 XML に基づく文字画像の印付け法の試み(守岡友彦)

この他に、『黄帝内経』『神農本草経』『王禎農書』等の中国科学史文献において、異体字問題やハイパーテキスト作成を具体的に検討するワーキンググループを随時行っている。

開催日時は、各月第1, 3金曜日, 10-12時, 場所はセンター1階会議室である。興味のある方は、班長の武田(takeda@zinbun.kyoto-u.ac.jp)までご連絡。(センター教授)

テキスト二種

宇佐美文理

ここに「テキスト二種」というのは、古典のテキストのうちの、ひとつは線装（糸綴じ）の本の上にあるテキスト。もうひとつはいわゆる電子テキストである。そして、ここで述べてみたいのは、「電子テキストは読むためのテキストに非ず」ということである。最初に誤解のないように記しておくなら、これは電子テキスト一般を駆逐すべしということでは決してない。いわばテキストの棲み分け、使い分けが必要ではないか、ということを書いてみたいのである。

そのように書くと、「そんなあたりまえのことを何をいまさら。あんなものを読んでいる人間がいるのか。」と思われた方もあるだろう。しかし、かつて古典の活字標点本が巷にあふれだしたとき、「あんなものを読んでいてはダメになる」と言われてきたが、今では例えば中華書局版の標点本を使って『史記』を読んだという人は少なくあるまい。既に活字標点本は、「読むための本」としての市民権をほぼ完全に獲得したと思われるほどである。要するに、「古典のテキストは電子テキストを使って読めばよい」という人がいつか現れるのではないかと、いう、ぼんやりとした恐怖が、この一文を書かせている。

さて、まず、なぜ標点本が「かつては」嫌われたかを考えよう。端的に言って、人のつけた点は邪魔、ということになる。ところが、たとえば『漢書』を読む場合、顔師古の注に従って『漢書』を読む、という姿勢は、現代の多くの学者の取る態度であろう。ところが、顔師古の注には従うが、他人の句読点はいやだという気になるのはなぜか。ひとつには、顔師古は信頼できるが、知らぬ人間の点は信頼できない、ということがあるだろう。では、中華書局版の標点本の点はどうか、と考えていくなれば、結局その点や注釈が信頼できるかどうかには帰着するように見える。

しかしわたくしは、それでもやはり点のない本

を読みたいと思う。確かに調べものをするときには、標点本は便利なので、中華書局版に手が伸びてそれを使う。しかしながら、『史記』や『漢書』を「読む」場合には、点のない本を読みたいと思う。さらにいえば、三家注や顔師古注が付いたものを読みたいと思う。「読むための本」と「調べものをするための本」とは、違うのではと考えるのである。

ところがここまでで、筆者の論理は破綻していることがわかりだと思われる。標点本はいやだ、人の解釈はいやだといいながら、三家注や顔師古の注がついたものを読みたいというのはいかなることか。また、注釈がついた本は、点がついていなくとも、既にその注釈の位置からして、標点の代わりになっている部分もあるのではないかと。

つまり「読むための本としては点のないもの」と考えるのは、信頼の有無とは違う問題ではないかと思われる。思うにわたくしは過去の中国の学者が書物を読んできたスタイルに近い形で読んでみたいのだ。すると、点のない正文本、つまり無注本を読むべし、ということにもなるが、しかしそれをやろうという気はない。顔師古注はほしいのである。読むときには、やはり、ほしいのである。

それはなぜだろうか。自問自答してみると、おそらくそれは、「清朝考証学」というタームに行き当たるのだと思う。自分は学部頃から、おもに清朝の学者の学問を学んで来た。そこで、知らず知らずのうちに、その学問スタイルだけでなく、彼らが実際に手に取った本、というもののイメージ群の中にいたのではないかと、いう気がするのである。それは、文閲（旧京都大学文学部文学部の図書館）で手に取ることでできた本が、ほとんどが清朝の版本であったということ、それが非常に大きな要因だったと思われる。学生のころ、自分の部屋は、確かに影印本はあったとはいえ、おおよそ洋装の本ばかり。まさに現代の日本の一空間だった。しかし、あの文閲という空間は、違っていた。

つまるところ、点のある本を読むのは間違っているような気がする、というのは、気分的なものに過ぎないのかもしれない。また、清朝考証学のやり方が、現代の中国学の中でどのような有効性を持つのかは、それはそれで議論になるところだが、ここでは触れない。

話がいささかずれてしまった。テキストの問題にもどろう。電子テキストは、校勘の不徹底もある。点の間違いもある。しかしそれらは、副次的な問題であり、それらをもって電子テキストの根本的な欠点とするのはあたらない。されば結局、標点本や電子テキストがいやだというのは、情緒的な反応に過ぎないのだとしたら、最初に書いた「棲み分け」とはどういうことか。

それは「電子テキストを使って読む人間の登場」に続く、もうひとつの恐怖があるからである。「モノとしての書物」の運命についての恐怖である。なにを恐れるのか。それは、「電子テキストで読むことができるなら、場所ばかり占領してやっかいものの線装本は段ボールへ」という発想の登場である。その次には「点のない本を残したいのだったら、全部写真を撮ってデジタル化し、現物は段ボールへ」がやってくる。事態は、書物というモノの文化全体に波及する。電子テキストを読む人間の登場が線装本という物体を段ボールに駆逐することは明白である。

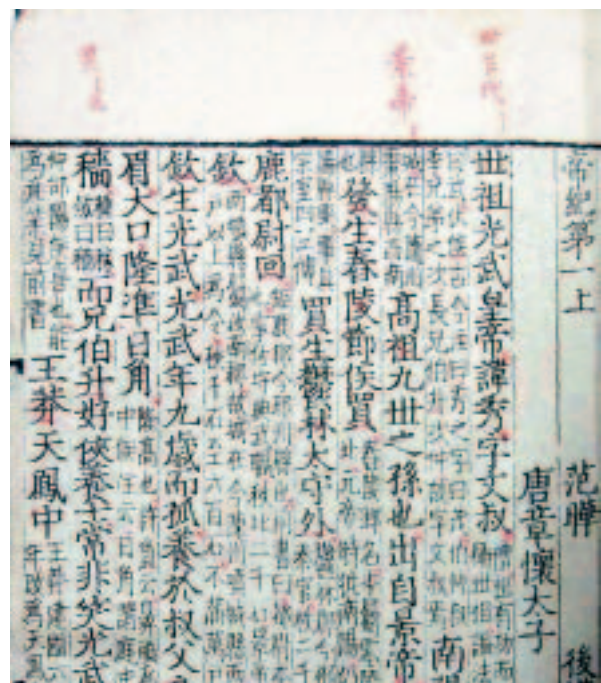
なお、ここには一つの問題が潜む。それは、書物というものは視覚的な情報として「抽象」可能である、という発想である。詳論するいとまはないが、端的に言えば、電子テキストは墨のにおいがしない、ということである。しかし、それを問題にする前に、とにかく当面わたくしが恐れるのは、線装本が段ボール行きになるのかもしれないという現実である。

電子テキストは、便利である。それは繰り返すまでもない。しかしそれは、「調べるために便利」なのである。そして、「読むために便利」という認識で迎えられる電子テキストがもし出てくると、ちょっと具合が悪い、ということが言いた

いわけである。もちろん、調べるために便利なもの、たとえば「索引」の登場が学問をダメにしたとはよくいわれることであり、本来はその外掘たる「調べる」部分についても、掘り返さねばならない。が、とにかく今差し迫った問題は、本丸の「読書」である。

しかしながら、索引が学問をダメにしたのではなく、学問のレベルが低下したので索引が登場したのだともいわれる。「学と云い学と云う、書冊を云わんや」であって、要は学問世界の側にあるのだ。

なおもう一度ことわっておくが、この文章の「論旨」は情緒的なものにすぎない。しかし、陶器のどんぶりでも、発泡スチロールでも、中に入っているラーメンが同じなら同じだ、という発想には、やはり抵抗を感じるのである。そして、大仰に言えば、それが文化というものではないか、と思うわけである。(人文科学研究所助教授)



中国ムスリムの音訳特殊文字

佐藤 実

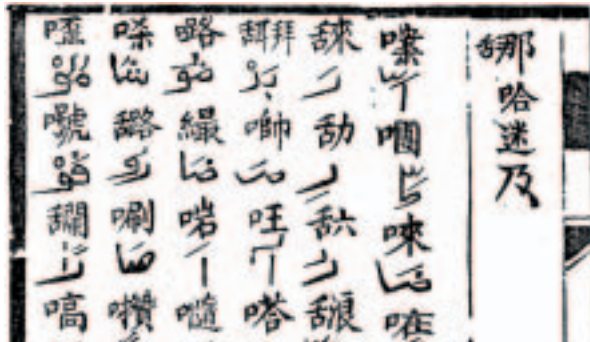
下図にあげた文字は余海亭という漢族ムスリムが著した『漢字赫廳』(光緒8年)に付されたアラビア語・漢語の対音表である。こうした文字がアラビア語経典を読む際に使用されたことがあった。普通に使用される漢字では表しにくいアラビア語音をなるべく正確に伝えようとしたのである。

漢語によってイスラームの思想を明らかにしようとする営みは明末以降になってやっと現れる。いわゆる回儒と呼ばれる王岱輿、馬注、劉智等がその先鞭をつけるのだが、彼等の著した思想書には音訳した単語も見られるが、図にあげたような特殊な文字は使用されない。

ところが、日常の礼拝や儀礼に関する書物が著されるようになると、音訳特殊文字が出現する。礼拝の際にはアラビア語による唱句を唱えなければならないし、クルアーンは当然アラビア語で読まなければならないからである。

礼拝、儀礼に関する書は伍遵契(1598頃 - 1698頃)『修真蒙引』あたりから刊刻されはじめるが、初めて音訳の文字にこだわったのが咸豊から光緒にかけて活躍した余海亭であった。余海亭は四川の人でもとはムスリムではなく、成都の回民食堂のコックであった。回民と交流するうちにイスラームに改宗する。そして当時の成都にイスラーム典籍が少なかったことを憂い、宝真堂というイスラーム典籍出版社を開いた。

余海亭は『漢字赫廳』の他に『択要注解雑学』



という書も著している。「雑学」とはムスリムの常識読み物で、沐浴、齋戒、礼拝のやりかたを解説したものだが、この『択要注解雑学』は雍正から乾隆にかけて成った『真功発微』のアラビア語部分に音訳を付したものである。その音訳文字も図にあげた文字を使用している。『択要注解雑学』は西南、西北地区の回族の間で広く読まれ、1982年に中国伊斯蘭教協会から影印出版されているが、この影印本の書末には特殊な文字に対する校正表が新たに付されている。一見しただけではどのような音なのかが解らないからであろう。恐らくは当時のムスリム達も最初からこの文字に親しんでいたわけではなく、アラビア語を話せる人に実際にアラビア語を発音してもらって、その文字の音を頭にたたき込んでいったのではないか。

アラビア語音を表現するための特殊な文字は楊竹坪『雑学音義』(民国9年)にも受け継がれている。その序には、アラビア語経文の読みについて「一字でも読み間違えれば、その意味は壊れてしまい、礼拝も真正なものでなくなってしまふ」とある。一字一句、正確に読むためになるべくアラビア語音に近づけるための音訳が特別な文字によってなされるのである。だが、楊竹坪自身も音訳の限界を認めて、「アラビア語を漢字で置き換えた音はぴったり合っているものとそうでないものがあり、各地で漢字の読み方も異なる。だからアラビア語の経文と漢字に置き換えた音は大きく異なってしまう。その違いを知るためには28のアラビア文字の音を知らなければならない」と言う。

音訳用の特殊な文字の構造や規則性を探ることも興味深いのだが、実はこうした文字はそれほど流行したわけではなさそうである。逆に一般に使われる漢字を用いて音訳したケースの方が多い。楊竹坪が指摘するように各地で漢字の読み方が異なる、つまり方言によって音訳のされかたも異なるのである。したがって音訳された漢字をアラビア語と比較することでその地方の発音をあぶり出すことに役立てることもできるのである。(日本学術振興会特別研究員)

人文研アーカイブス（４）

尚書正義

二十卷

漢孔安國傳 唐孔穎達等疏

梶浦 晋



掲載の書は、弘化四年に熊本藩の時習館において、掛川藩儒松崎慊堂が足利学校所蔵宋刊本を影鈔した本にもとづき覆刻した和刻本で、近代の印刷にかかるものである。刊行の経緯は巻頭に付された弘化四年の林燿（幕府儒官・林家十一代）の「影鈔宋槧尚書正義序」に詳しい。

本所では、開設当初より、研究に有用な書物をできる限り整備することに意をはらい、古刊本や稀覯本の収蔵はさして多くない。また張之洞『書目答問』を基準に、清朝考証学を中心とする学問的実用書を、主として北京の来薰閣など中国の書店から入手していたこともあり、唐本がほとんどを占め、和刻本はきわめて少ない。

この書は、広く流布している一般的なものであるが、書中各所に朱筆による校合が記されていることが注目される。巻第二十末尾に、吉川幸次郎による以下のような跋がある。

京都古梓堂文庫有舊鈔本尚書注疏舊林氏讀耕齋書審其款式／當出自越刻八行本而與足利學所藏宋本時有異同蓋其所據之本／印較早補版少也又足利闕頁此皆不闕則虎貴中郎誠足貴矣其／原書今莫知所在或云楊惺吾東游時得宋刻一部後歸黃氏紹箕／張氏之洞今在天津李氏者即此未見其書難可臆定今就時習／館本細爲校勘又留書景三十頁併存之我庫云校者佐藤君匡／玄高倉君正三梅原君慧運白木君直也安田君二郎昭和十二年／十一月起十六年二月迄吉川幸次郎識於經學文學研究室

これによって、この書に加えられた朱筆は、本所経学文学研究室で行われていた『尚書正義』の定本作成作業の一貫としてなされた校合であることが知られる。

『尚書正義』の定本作成は、本所の前身の一つである 東方文化研究所の重要な事業のひとつで、昭和十四年から十八年にかけて『尚書正義定本』全8冊として出版されている。また全文和訳や校勘記たる「讀尚書注疏記」が吉川の名で公表されている。（吉川全集第八至第十，第二十一）

（センター助手）

HP・TOPICS

2001年10月に実施した漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）の講義資料を、ホームページ上で公開しています（下図参照）。

また、CHINA 3 for WWWは、題名に加え、著者名を用いた検索も可能になりました。よろしくご利用ください。



漢籍担当職員講習会

Last modified: Tue Oct 9 16:28:12 JST 2001

[\[English page is here\]](#)

漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）

平成13年度

2001年10月1日(月)～10月5日(金)に開催しました。

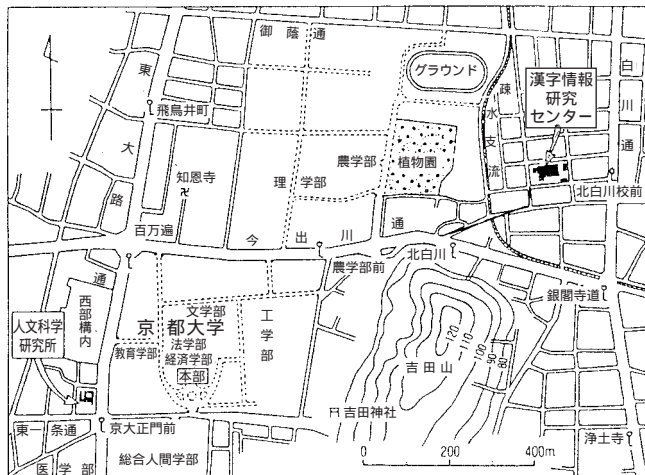
- [プログラム](#)
- 講義資料
 - 宮澤彰（国立情報学研究所実証研究センター）「NACSIS-CAT総合目録における中国書目録」[\[plain text\]](#) [\[MS Word\]](#)
 - 村田康彦（京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター）「[東洋学文献類目とCHINA 3](#)」
 - 守岡知彦（京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター）「[CHINA3 for WWW](#)」

漢籍担当職員講習会（初級）

平成13年度

2001年11月5日(月)～11月9日(金)に開催されます。

- [プログラム](#)



【DICCS NEWS】

・2002年3月8日に、本センターが幹事機関の一つになっている全国漢籍データベース協議会の第2回総会が、学術総合センターで開催された。全国の図書館関係者及び中国学研究者約70名の参加があった。議題と発表者は以下の通りである。

今年度の事業報告 高田時雄

全国漢籍データベースのデモンストレーション

安岡孝一

NACSIS 総合目録と全国漢籍データベース

宮沢 彰

入力フォーマットとデータ入力の実際

梶浦 晋



・台湾の「数位典藏国家型科技計画（National Digital Archives Project）」の代表団である王輝庭（国立故宮博物院）、陳光祖（中央研究院歷史語言研究所）、邱婉容（国立台湾大学図書館）、吳国淳（国立歴史博物館）の4氏が、日本におけるデジタルアーカイブの進展状況の視察のために、2002年3月26日に来所の予定である。

・最新のセンター刊行物

「善隣協会・善隣訳書館関係資料 徳島県立図書館蔵「岡本韋庵先生文書」所収」（東方学資料叢刊第10冊，狭間直樹編，2002年3月）

発行日 2002年3月15日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>